

『ざわざわざわ……さー』

(草の揺れる音、風の流れる音)

ノラ

「はつはつはつは……！」

町の外壁の外。

モンスターも現れないか、現れても小さく弱いモノしか出ないその場所はノラは走っている。

既に何週も走っているのだろうその額には、汗が幾つも浮かび、息も今にも絶え絶えといった様子であった。

ノラ

「ほん、つとに……つ！

なん、週……走らせるん、だよ！　お……つさあん！！」

ひーひーという息切れの中、ノラがたまらないといった様子で文句を吐き出す。

その声は彼女のすぐ後ろで、冒険者としての装備を纏った姿で涼しい顔をして走っている貴方へと向けられたもののようにであった。

【鍛えて欲しいって言つたのはそっちだらう？

足の速さは認めてるけど、冒険者は体力勝負だ。

活かせるだけの体力をまず身につけなきや何の意味もないからぞ】

ノラ

「そう、かも……しれない、けど……ぜーはー、ぜーはー！」

オレ、が……思つてた、訓練つて……こういうのじや、なくてえ……

つ！

もっと、戦うとか、そういう……訓練だつて、思つてたのに……さあ！！」

思つていた訓練ではなかつたためか、ノラが不満そうに途切れがちな息のまま必死に文句を言う。

貴方はその声を聞きながら、小さく笑う。

かつて自分もそうであつた冒険者になろうとする者なら、誰でも最初に思うだろうその考えが微笑ましかつたのかもしれない。

だが、貴方は彼女の願いを聞き入れ共に冒険者をやろうと決めた。……だからこそ、退屈だと言われても基礎の基礎から彼女に仕込むのを止めるつもりはなかつたのだ。

【文句は言わない約束だらう？

支える体がしつかりしてなきや、技術なんて付け焼刃であつさり折れるもんさ。

それが嫌だつてんなら、やっぱ家で待つて貰うしかないかもなあ？】

ノラ

「くつ……ぬおつ！ オレが、それは嫌だつて、言ったの……分かつてる、癖にいつ！

ああ、くそつ！ 分かった、よお！ 走れば、いいんだろ、走れ……ばあつ！！

貴方がノラにからかうように言葉を告げると、彼女は見る間に顔を赤くし怒り出す。

単純な手に素直にやる気を出してくれる少女が愛おしくて、貴方はつい、また笑みを溢す。

ついでに、少しばかり悪戯心が湧いてしまい、走る彼女に併走するよう

に体を寄せ。

【ついでに、体力がつけばその分夜の方も長く楽しめるようになるかも

しれないしな？

体力が上がった分だけ、まだまだ色んな“遊び方”もあるんだし、可愛

がってやれるぞ？】

などと、愛しい少女の耳へとからかい半分、本気半分な年上からのたちの悪い冗談を聞かせてみせる。

ノラ

「んな……！？」

予想通りノラが顔を赤くし言葉に詰まるのを見届けると、そのまま貴方は足を速め少女の先を走り出す。

顔を赤くした少女は、恥ずかしさと怒りに震えるように肩でしていたはずの息をより荒くしながらも、必死に貴方を追いかける。

《だだだだ》

(走る速さが強まる音)

ノラ

「は、走つてる……最中にい！
変な、冗談……言うんじや、ねえよお！
この、おっさんの、ドスケベッ！ ヘンタイツ！
待て、待ちやがれえ！！」

怒りに任せ、先ほどよりもペースを速めるノラにギリギリ追いつかれない程度に速さを調整しながら、彼女に見えないよう貴方は大きな笑みを浮かべる。

それは、訓練が終わつた後に機嫌を損ねて いるだろう彼女に殴られるだろうと思ひながらも、こうして過ごせる日々を手に出来た幸せを、囁み締めたためであつた。

ノラ

「この、クソ！ 待て、待てつて……おっさん！！
何が、オレに手を出す気はなかつただっ！
完全に、ムツツリなドスケベ親父じやねえかあ！
このつ、このお……一発、殴らせろおおおおお！！」

明るい日差しの下、怒るノラの怒声を浴びながらも、貴方とノラは走り続ける。

今日や明日に訪れるようなすぐになれるものではないが、お互いが望んだ未来に近付くために、共に日々を積み重ねていける……その幸せを感じながら。

ノラ

「へそ、ああ……もお！」

絶対、ゆるさねえからなあ！